

優秀賞

互助の精神

岩手県 一関第一高等学校附属中学校 二年 阿部 千咲

「大丈夫?」

起き上がれない私に、みんなはやさしい言葉をかけてくれた。

私はバスケットボール部に所属している。中総体に向け、毎日毎日、練習を積み重ねてきた。迎えた中総体では、これまで練習してきた力を発揮しようとプレーに集中した。

しかし、試合開始のわずか六分後、悪夢が私を襲った。ボールを追っているとき、足に激しい痛みが走った。そのまま倒れ込み、起き上がれない。すぐに病院へ向かった。

診断の結果は、全治2カ月の肉離れだった。これまで一生懸命、練習に取り組んできたのに、ケガでバスケットが約2カ月もできなくなるという事実ショックを受けた。

その日から松葉づえでの生活が始まった。両手がふさがっているので、荷物を持つことができない。階段の昇り降りもできないため、私だけ友達とは別にエレベーターで教室へ移動した。また、制服から運動着に着替えることにも時間がかかった。

楽しかった友達との電車通学もできなくなった。そのため、登校は毎朝、母が学校に車で送ってくれた。

学校に着くと、きまってバスケットボール部の友達4、5人が私のカバンを持つため、玄関や教室の前で出迎えてくれた。そして、「何か困ったことがあったら、遠慮しないで言ってね。」と、みんな笑顔で言ってくれた。私も「ありがとう。」と笑顔で返したが、複雑な気持ちだった。

初めのうちは、あまり友達を頼らなかつた。頼ると、みんなに迷惑をかけてしまうと思ったからだ。しかし、私が何か行動しようとする時、みんなは「大丈夫だよ。やってあげるよ。」と、きまって声をかけてくれた。

友達のやさしさに、私の複雑な気持ちはしだいに素直な感謝と、うれしさに変わっていった。そして、できることは自分でやり、できないことは無理をせず友達を頼った。友達に手を貸してもらった時に、私は「ありがとう」と感謝した。

どうして、みんなは積極的に手を貸してくれたのだろう。その疑問はすぐに解決した。「互助の精神」という担任の先生の言葉が頭に浮かんだ。「互助の精神」とは、互いに助け合う心という意味である。困っている人には手を差し伸べる。私のまわりの人たちは、「互助の精神」で私に接してくれたのだろう。

ケガをして、できないことが増えた。しかし、ケガをしたことで、初めてみんなに支えられながら生活していることに気づくことができた。また、「互助の精神」の大切さを、身をもって学ぶこともできた。

今日もバスケットボール部のみんなは、汗を流し練習に励んでいる。まずは新人戦の全力のプレーで、バスケットボール部のみんなに恩返ししよう。